

第2回組織・戦略委員会開催

日 時：2025 年 1 月 18 日（火）13：00～16：00

形 式：対面（於：四谷三丁目）

出席者：望月賢司（委員長、組織・戦略委員会担当理事）、武川俊二委員、浅野健一郎委員、梅田暁委員、金井秀雄委員、萩原浩司委員（広報・デジタル委員会委員）

事務局：梶正彦理事長、三木健一常務理事、堺文亮常務理事、手塚友恵理事

欠席者：藤村健委員、鈴木章久委員

以降、敬称略

議題

1. 開会挨拶

- ・望月委員長：公益財団法人としての新たなスタートにあたり、本委員会
は単なる意見交換ではなく、未来への戦略について、情熱をもって打ち立
てる場としたい。山の無限の可能性を念頭に、力強く議論を進めたい。

2. 本日の進行について

- ・三木常務理事：本日の委員会の流れを説明（次第に沿って進行）。
- ・浅野委員：ビジョン策定のアプローチ方法について説明（提示資料に基
づき）

3. 「山」と当協議会についての共通理解醸成

- ・三木常務理事：ビジョン策定に際し、前提として共有すべき基礎的な確
認事項について説明。（配布資料の説明は省略）

4. ビジョン策定に関する議論

- ・梶理事長：HP は情報が増えたが、協議会の目的や活動内容が訪問者に分
かりづらい。既存および将来の支援者に対し、ビジョンや方向性を明確
に示す必要がある。
- ・望月委員長：外部関係者との関わりを考慮すると、理念やビジョンを定
め、それを活動の核とする必要がある。
- ・手塚事務局長：将来の世代交代も見据え、協議会のアイデンティティを
示すビジョン設定は極めて重要。HP 編集方針や支援者拡大の基盤とな

る。

- ・金井委員：近年、小学生がリスクや費用面から登山機会が減少している課題がある。こうした現状を浮き彫りにし、協議会のあるべき姿を考えることがビジョン策定に繋がる。
- ・萩原委員：日本には約1万7千の山があり、国土の7割が山林であること、首都圏から富士山まで約100kmと近いことなど、山の多さや近さを強調すべき。国民が山の存在を自覚する材料となる。
- ・手塚事務局長：「山」という言葉が、単なる地形だけでなく、関連文化や伝承なども含めた広範な概念であることを明確に表現する必要がある。
- ・堺常務理事：限られた人員と予算の中で活動するため、協議会が注力すべき「山の持つ機能」は何かを戦略的に考える必要がある。
- ・武川委員：資料に示された「山の持つ機能」をそのまま実行目標とするのではなく、「今、私たちが本当にやるべき事」を真剣に議論し、定める必要がある。

5. ビジョン（案）の検討

- ・三木常務理事：事務局より、たたき台として3つのビジョン案を提示。
- ・望月委員長：理念は抽象的・哲学的、ビジョンは具体的・理想的・未来志向的と整理。ビジョンは状況に応じ見直す性質のものか。
- ・梶理事長：（提示された案の中で）案C（人々の活動に触れているもの）がシンプルで良い。
- ・手塚事務局長：山を舞台とし、人間の活動や「国民生活の向上」に焦点を当てた表現が良い。
- ・金井委員：案Cが良いと思う。自身の考えとしては、現代社会の問題意識（例：子供の登山離れ）を踏まえ、「山の魅力を伝え、自然と人間の関わりを考え直す」といった問いかけ型の表現も有効ではないか。
- ・萩原委員：案Cが「山に親しむ機会を得て、山の恩恵に感謝する」という山の日の根源的な意義に近い。特に「親しむ機会を得る」という前段が重要。この能動的な行為があって初めて感謝に繋がる。「親しむ機会（魅力伝達）→学び守る気持ちの醸成→登山等（親しむ実践）→国民生活の豊かさ」という流れを表現できる文言が良い。制定時の議論や、地域における山への感謝（例：大山の水の恵み）の姿勢も参考にすべき。
- ・梅田理事：ビジョンは寄付依頼活動と連動させる必要がある。企業は寄

付の使途や説明責任を重視する（例：緑の募金）。協議会も使途を明確に説明できれば、税制優遇もあり寄付を得やすくなる。「山に親しむ」は良いが、活動の焦点をどこに当てるか（国民生活向上は広範すぎる）。具体的な連携事業等でお金が動く仕組みがないと持続可能にならない。例えば子供の健全育成等にフォーカスしたイベント資金として訴求するなどの工夫が必要。

- ・ 三木常務理事：協議会の5つの活動内容は、外部から見ると具体性に欠け分かりにくい。具体的な活動内容をもって訴求する必要がある。
- ・ 梅田理事：活動の焦点が山岳・トレイル・フィールド等ないと分かりにくい。「健康」では範囲が広すぎる。
- ・ 手塚事務局長：「子供達がこういう事で困っている→改善のためにこういう事をやる→それは子供達の育成に繋がる」という具体例を最初に示し、その上で協議会の活動分野に注目してもらう手順が良い。企業は具体性がなければ資金を出さない。
- ・ 梅田理事：具体的な事業計画を示し、そのための寄付をお願いするという形が、企業側も予算化しやすい。
- ・ 三木常務理事：協議会の予算規模は年間11～15百万円程度。人件費・事務所経費等の間接費を除くと、イベント・広報等の直接経費は数百万円。人的リソース不足もあり、理想的な方針に現実の運営が追いついていない面がある。
- ・ 梅田理事：ビジョンと資金調達（集金）の仕組みが連動していないと機能しない。
- ・ 堺常務理事：ビジョン策定の目的（内部向けか、外部向けか）を明確にすべき。スポンサー獲得が目的なら策定は必須。ビジョンと資金調達の連動は不可欠。
- ・ 武川委員：協議会の位置づけは、単に山を楽しむ活動の推進ではなく、国民全体に対し「山の日とは何か」を明確に示し、共に参加を促すものとすべき。「山も人も豊かに」という表現は再考の余地あり（AI時代における自然体験の価値、金銭だけでない豊かさ等）。
- ・ 望月委員長：協議会の名称（全国、協議会）から、具体的な事業主体というより、山に関する多様な団体が集まる「プラットフォーム」としての役割（下支え、繋ぎ役）が本質ではないか。この認識の違いで目指す方向性が変わる。

- ・萩原委員：協議会の義務的な役割は後者（プラットフォーム）。山の日制定後、具体的な活動（緑化、安全等）は既存団体が行い、協議会はそれらの活動を広く国民に伝え、促す役割。5つの行動理念（活動内容）の推進を働きかける。
- ・萩原委員：祝日の意義（山の恩恵）への理解促進が重要。歴史的視点（低山ブーム等）も踏まえ、身近な山の恩恵への「気づき」を促す活動が、ビジョン実現の行動指針に繋がる。制定時の裏話（国益論、経済界への配慮等）も参考になる。
- ・武川委員：山の日制定協議会の設立と制定後の経緯。制定後は国の仕事と言われ、民間の役割が問われた。「登山者の祝日」ではなく「全国民のための祝日」とするためのスローガンが必要とされた。山に直接行かない人も含め、国民全体が山の恩恵を受けている視点が重要。協議会の役割は、山に関わる多様な機会（文化的なものも含む）を提供すること。最近の文学（バリ山行）や著名クライマーの話題等、一般の関心も活用し、地道な山の営みなども紹介していくべき。
- ・武川委員：協議会は、全国の多様な活動をつなぐ「コーディネーター」役を担うべき。それが話題性を生み、活動の広がりにつながる。
- ・梶理事長、武川委員：個々の活動をつなぎ合わせ、全体像として見せる役割が重要。資金も比較的にかからない方法である。
- ・望月委員長：そうした役割であれば、関連団体からの寄付も期待できるかもしれない。
- ・武川委員：可能性はある。大上段な理念だけでなく、具体的な小さな活動を拾い上げ、繋いでいくことで話題性を高めるアプローチが良い。
- ・三木常務理事：武川委員、萩原委員の意見は、梶理事長が当初から提唱している「繋げる」ことの重要性和致する。協議会の「事業連携」はこの考えに基づいている。HPの投稿分類名「山の日ネットワーク」にも、投稿者同士を繋げたいという想いを込めている。皆様のご意見を参考に、この後、ビジョン(案)の決定は理事長に一任していただく事でよろしいでしょうか。
- ・参加者全員：異議なし。

この後、今後の事業戦略、収益確保についても活発な意見交換をして委員会を終了した。

以上